



スケトウダラ（オホーツク海南部）

①

スケトウダラは北太平洋に広く生息しており、本評価群はこのうちオホーツク海南部に分布する群である。

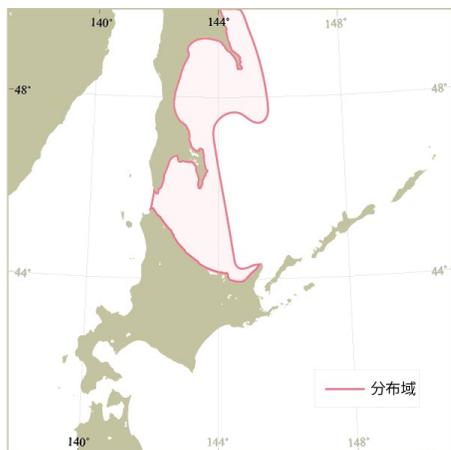


図1 分布図

本資源は日本水域とロシア水域に連続的に分布し、成長の一時期に日本水域に來遊する「跨り資源」である。

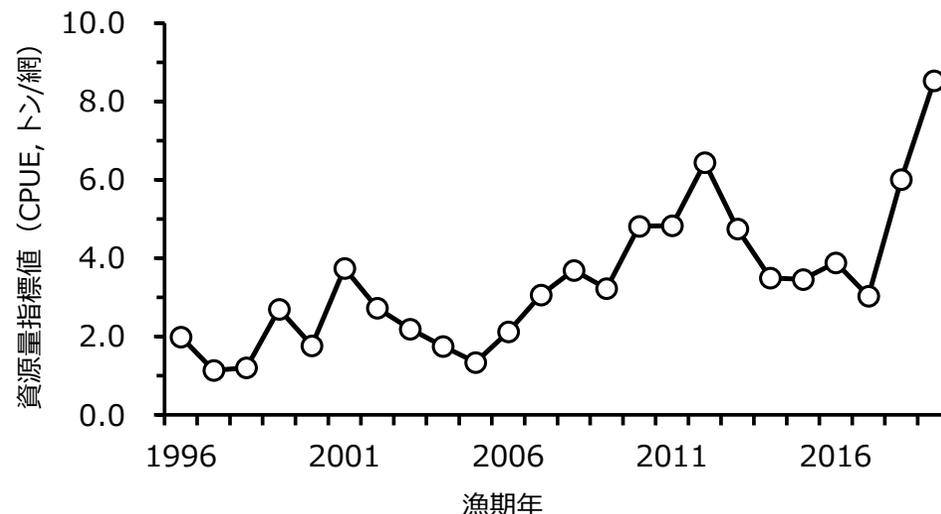


図3 資源量指標値の推移

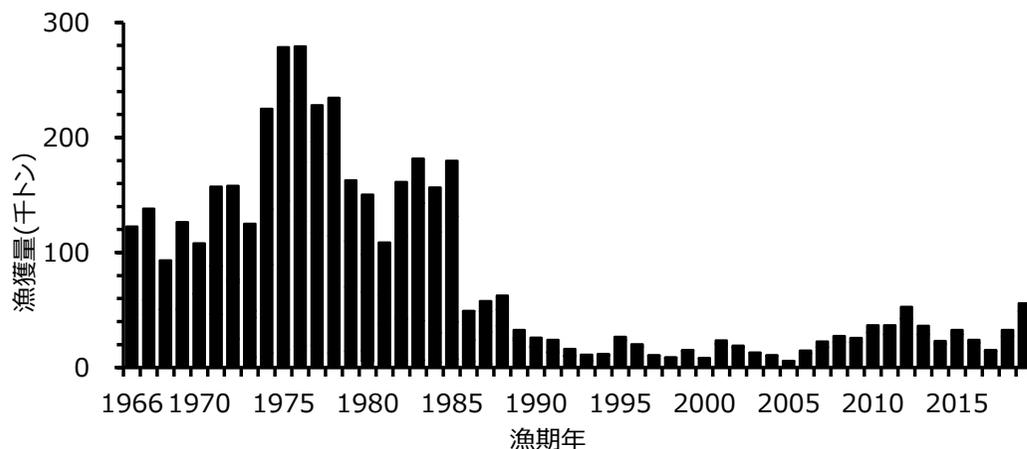


図2 漁獲量の推移

本資源の漁獲量は、ソビエト連邦（現ロシア連邦）の漁獲規制強化等で1986年漁期（4月～翌年3月）に大きく減少した。近年の漁獲量はロシア水域からの来遊量に左右されると考えられ、2010年漁期以降は2万～5万トン台で推移している。2019年漁期は5.6万トンであった。

沖合底びき網漁業のかけまわし漁法による、スケトウダラ狙い操業（1日の総漁獲量に占めるスケトウダラの割合が50%を超える日の操業）の単位努力量当たり漁獲量（CPUE）を評価に用いる資源量指標値とした。

スケトウダラ（オホーツク海南部）

②

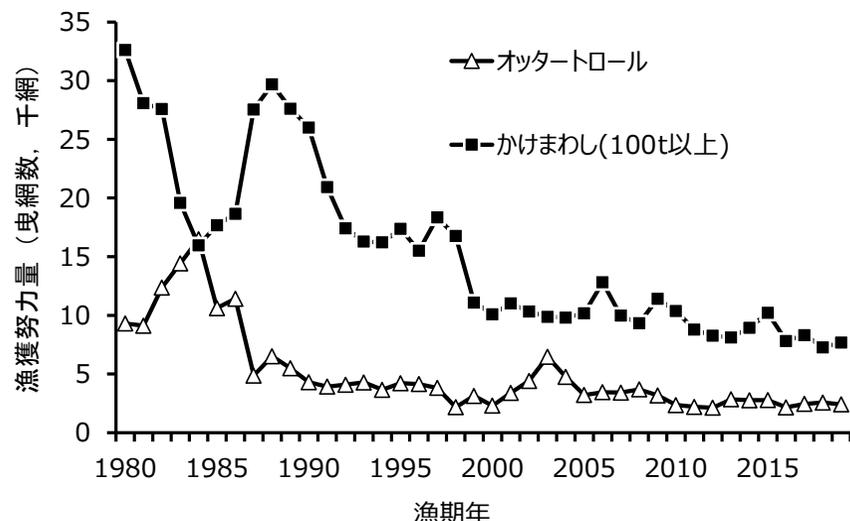


図4 漁獲努力量の推移

日本水域での漁獲の大半は沖合底びき網漁業による。減船の結果、許可隻数は1986年の80隻から2016年以降は14隻まで減少した。オッタートロール・かけまわし漁法のいずれにおいても、漁獲努力量は過去に比較して抑制されている。

本資源では資源量指標値を回遊してきた資源の来遊量と資源利用の指標と考えて、その資源量指標値のデータ範囲の中で求められた平均水準・過去最低値を評価の基準にすることを提案する。2019年漁期の資源量指標値は、平均水準を上回り、過去最高値である。

本資源の管理基準値等の検討について

本資源の資源量指標値は日本水域における情報に限られ、「跨り資源」である本資源全体の動向を捉えることができないことから、「漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に従い計算される管理基準値（資源量水準）案に基づく漁獲管理規則の提案は困難である。

本資源では、来遊量の年変動に配慮しながら漁獲を管理することが重要である。

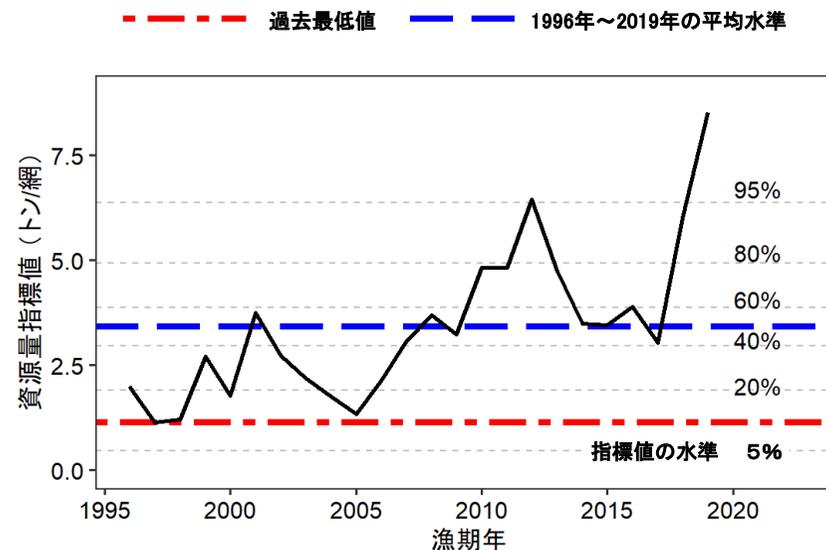


図5 資源量指標値の過去最低値と平均水準